
僕 女の子

秋田浩美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕 女の子

【著者名】

Z5658H

【作者名】

秋田浩美

【あらすじ】

男の子として学生生活を送るよつになつた。友達の進一君に助けられ過ぎしていく。

今日から、2年A組の生徒だ。学校は広い道路を曲がった所に校門がある。きれいに手入れされた木が植えられた、小山を中心にして円を画くように歩道がある。その奥に、複雑に細工された、両開きの扉がついた門が構えていた。横には、塚原高校と重々しい字が書かれている。

私は、落ち着いて、びくびくしないように、教えられている二階の教室に入った。早めに家を出たから、まだ、人は少ない。

だれかが、後ろの席で手招きしている。おそるおそる田田を向けた。戸惑っている私に、

「こっちだ。何してるんだ。チビ」罵声が飛んできた。みんなが振り向いて私を見た。チビと言われても、そんなに小さくはないのに思いながら、机の間のカバンを避け、彼の手が置かれている机にたどり着いた。

その時、解った。彼だ。「君なの……」顔が真っ赤になつたと思う。「ふん、昨日、来るかと待っていたんだ。寝坊したのか——、お越しにいけたら、どんな寝そうしているか見られたのに残念だな」顔はますます赤くなる。ほっぺが熱い。

すじいい男の子だ。少し優しくしてくれればいいのだと想いながら、「おはようがざいます」

小さな声しか出ない。

「まあいいさ、教科書を出して、ここから始まる」彼はページを教えてくれた。そのページには、「江坂進一」と書いてある。いきなりこうかよ。進一は、私に尻餅つかされたお返しをするつもりなんだ。

「わかった」小声で答えると、自分の名前を書いた。「塚原祥子」と横目でそっと見た。彼は、クスッと笑うと私の姿をじろじろ見たが、何も言わない。彼はひとりでにやけて、何かを楽しんでいた。

進一の指導で、その後の授業は、あれ出せ、これ出せと、親切なのか、いじめなのか解らないままに進み、午前の最後のベルがなり始めた。同時に手を引っ張られて、教室から飛び出した。

「しょう、ちやんと歩けよ」

「そんなに引っ張らなくともいいだろ」

「鈍は、置いて行つてもいいんだぜ」「何が何やら解らないうちに、行列に並ばされた。私は、膝に手を置き、前かがみで息を整えた。

「ほら、どのパンにする。みんなが順番を待っているんだ。これ三つ」「サンドイッチとジュースを買うと、また来た口一かを引っ張られた。

「もう、いい加減にしろよ。なんだよいつたい」私は腹を立てた。「これがいつもの昼食のパターンだ覚えておけ、遅いと抜きだ」教室にもどると、イスに掛けるなり言われた。まだ、おかしいーーー。

私の机は無残だ。片づけなしに飛び出したからだ。彼はなれたもののようだ。きれいに何も出ていない。

進一は、サンドイッチの一切れにかぶりつき手に持つジュースを飲みながら、残りの一切れを私に押し付けて、「食え」。私が迷っていると、自分の口を開け、手を近づけて、食べるまねをする。拒否すれば、自分で食べさせに来そうだ。怖いから、仕方なく受け取り食べた。

そして、おもむろにカバンから、お弁当を出した。進一の顔は見ものだ。

「お前なー、持つてきたなら、そう言えよ」変な男、自分勝手に人を扱いながら…。

「よくいうよ、訳もわからずに、引っ張り出したくせに」その後からずーと、私は、御弁当を半分、パンを一切れ食べる習慣がついた。

断りは許されない。必ずパンを食べさせられた。まわりの子達が不思議そうに見てている。ある子がそつと教えてくれた。今までは、人の御弁当を食べたことはない。

彼は、荷物になるからお弁当は持つてこないそうだ。なんて急げ者だ。私のお弁当は平気で半分食べる。ママさんの手作りなのに、私が持ってきたから、私のお弁当だと、へんな言い方をして、進一はきれいに食べてしまう。ママさんには「おいしいです」と二人分を込めて伝えた。

後ろめたい気持ちはある。せめてもの慰めは、クラスが離れるいる勝彦からの非難の目で見られないでいられる。いつかは、ママさんに話そうと思う。

私の学生生活は、順調に過ぎている。そう思うことにしている。兎に角、うるさい兄貴が一人付きまとい、あれこれ指図する。反対しようものなら、お目玉か、睨まれる。

私が文句を言えば、教室のだれかが笑い、我慢せよと言つ。これが順調と言えるか疑問だ。けれど、だれも進一に注意してくれない。ところが、順調でない人が出てきた。進一が、パンを買いに出ている間に、とんでもない約束をさせられた。今日の帰り、裏門で待つていてるから、一人でくるように言われた。それからは、なにかが少し変わってきた。私は呼び出されることはない。友達もわざかしかい。誰の邪魔もしていない。

御弁当を食べるときも、午後の授業を受けるときも、時々彼女を見ていた。何の話があるのか落ち着かない。彼女もちらつと私を見る。「どうしたんだ」と進一に小声で聞かれたときも、「なんでもない」と答えてみたが、態度に出るのかなと焦る。進一に聞けば、何かわかるかな?一緒に行くと言われたら困る。

話さないことにした。のろのろとしか思えない時間も、すべて終わつた。急いで机のものをカバンに詰めた。「先に行くよ」と声を掛け歩き出した。

「待てよ、何でそんなに急ぐんだ」肩を抑えられた。顔を見て、少し悲しくなつた。話で一緒に行けたらいいのにと思いつつ、一人で行かなければいけないと諦めた。

「すぐに済むからまつてろよ」進一は、窓の点検に行く。

自然に何をやるか、どうするか、誰がやるかと、すぐに判断して、身体を動かす。自慢するでもなく、全体を見回して、みんながうまく切り抜けられるように、気を使う。そんな進一の顔が、私を見ている。

「ごめん、今日は急ぐんだ。また明日な」信じられないと言う顔の進一を残して、小走りにローカへ出た。

階段を駆け下り、あまり人のいない所を通り裏口に出て、駐車場になっている横を、裏門へと急いだ。色とりどりの車や自転車が置かれている。

「ここよ。赤い車の所」彼女の声に呼び止められた。彼女のほかに、二人が一緒だ。

「私は優子、和子に友子」と紹介してくれた。
「あなたの名前は知ってる」と言いながら、「ビックリしたーー。驚かすつもりはないの。少し話がしたいだけ」私は、彼女たちを見つめていた。

彼女は美しい。背は、私と同じくらい。とてもスマートだ。白い顔に、長い髪を二つに結び、耳の横に垂らしている。

優子さんが、何を話したいのか解らないから、黙っているより仕方ない。

「立つていで座らない」和子が言う。一人は、優子さんより日に焼けている。部活は外だろう。二人は隅の花壇のブロックに腰を下ろした。私は、彼女たちと向きあいのブロックに腰を下ろした。

「あのねーー」彼女は言いにくそうに、話し始めた。

「あなたが、進一と仲良くなっているのは、誰でも知ってるの」なんとなく辛そうな顔に見えた。それは違う。君には仲良しに見えても、私はいつもお手上げなんだ。他の一人は頷いた。

また、彼女は話し始めた。

「でもね、見てると辛いの。とても仲良しだったの」またも二人は頷いた。私は認めるよ。彼女と進一なら釣り合いが取れている。確

かにいい友達だ。かつこよくも見える。

「進一は、特別な人なのーー。頭がすばぬけていいの。容姿も見たとおり長身で、均整が取れているし、運動は抜群で、どんなスポーツも一番でこなすーー。文句がない人なの」私は聞いていた。そのとうりだと思う。

私をいじめるのを別にしたらのことだけどー。進一は男らしく、きりつとして背は高い、鼻は申し分なくかっこいい。その下の口は、白い歯をのぞくかせると、最高の笑顔になる。何か話しかけるかと、口元から目が離せない笑い方は、口の横を少し上げる。ほんとに魅力的な男の子だ。

だけど、何で私に思い起こさせるように話すのか解らない。進一の側にいられないほうがいいみたいに聞こえるのは、なぜなのか…。

「僕が、彼の側に居るのが、優子さんの気にさわるわけなんだ…？」私は、解らないまま聞いてみた。彼女は、「それもあるけど、違うの」言いにくそうに、自分の手を見つめていた。白くて、ほつそりした、長い手をしている。

「僕にはわからないけど、どうしてほしいのかな」と聞いてみた。誰も無言だ。

「僕は、進一の側で授業を受け、昼は、御弁当を半分個にして食べる。一緒に遊びまわり、みんなと帰る。それが、学校に居るときの日課だよ。これのどこが不愉快なんだ。僕には理解できないよ」私が進一を独り占めしているわけではない。大勢で遊び、話をしている。四人とも、黙つたままだ。

私は、膝を抱えて前の車を睨んでいたが、頭を振っていたらしい。彼女は私を見て、友達を見た。また、私を見て決心したようだ。

「あなたは悪くないのーー、でも、あなた自身が悪いの。ごめん。面倒な言い方ね」彼女はため息をついて、私を見つめた。私自身が悪いといわれても、何もしていない。私のほうがいじめられている。やつと、本題に入るみたい。

「あなたはかわいいの。男の子にしてわね。それに優しすぎるのよ。

美形でもあるの。それが困るのよ」彼女が一休みした間に、私は考えた。

背は156、山の中を駆け回り、川で魚と泳いだ私だから、太ってはいない。そうか、みんなが見ているのは、私ではない。私の偽者なんだ。それでこまつてているのか。私にも、どうしていいかわからない。

「あのね、友達でいるのはかまわないの。だけど進一に、男の子だけを好きにさせたくないの、わかるでしょう」男の友達はいるだろうに、何で僕をいけないと思うのか戸惑つた。

「それはぼくではなく、進一の問題だらう」と言いながら睨みつけた。

「今まで、あなたのよつな男の子を好きになつた事はないの。進一は理想的な男性なのよ」

「ああ、そうかよ。理想的なんだ。君のような女の子を好きになればな」なんだかむかついてきた。

「進一は、僕を好きではないよ。怖がらせていじめるのが好きなだけさ。いつも引っ張りまわして、困らせて喜んでるよ。それが理想的な子のやることかよ——安心していいよ。進一からは、離れるようにはきをつけるから」彼女は安堵したようだ。もう一度、自分のほうを向かせたいのだろうな。

「ねえ、そろそろ帰らない」一人の子が言い出したので、あらためて辺りを見て、かなり遅くなつてしていることに気がついた。四人は裏口から、そつと抜け出した。

次の日曜日は、最悪だった。朝の食事を早く済ませて、カバンを持ち家を飛び出した。パパさんもママさんもびっくりしている。勝彦は、「一緒に行くからまつてろ」と一階に駆け上がりつて行つた。僕は無言で、ただ急いだ。町の東に見えるホテルを目指して歩いた。生徒たちにも、知り合いの人にも、誰にも会いたくない。私は、上着を脱いで、裏返しにすると、カバンを包んだ。シャツにズボン

では学生とわかるかもしないが、朝の早い時間帯だから、あまり見つかることはない。町の中の車も少ない。会社に行くのか何人かが歩いているだけ。私は、早足で歩いて息が切れたが、ホテルに着いた。宿泊の人もゆっくりしているのか辺りは静かだ。ドアを押したら開いた。

古い建物のようだが、落ち着きのあるホールの中を、フロント目差して歩いた。男の人が一人いた。不思議そうな顔で、こちらを見つめている。変な荷物を持ち、学生のような男の子が近寄るのを見ていた。

「ベランダのある、小さな部屋をお願い」　呼吸が乱れていたから声が不自然だつたのだろう。男の人は、警戒し始めた。

「できるだけ、上の階にしてね」　私は言いながら、服に包んだ力バンを出して、中から財布を取り出し、カードを抜き出して、男の人に渡した。男の人は、手を出しかねていた。

「お願いだよ。急いで」　私は頼みこんだ。自分で自分のしていることが不思議に思えてきた。でも、困ったときには、今のような行動をするように教えられていた。

男の人はカードを見て、私を見た。一瞬の間、考えてから、機械にカードをかけた。男の人は画面を見て、私を見た。理解しかねているようだ。また画面を見てうなずいた。それから、

「あの柱の陰でお待ち下さい」と　言い残して、後ろのドアを開けて、誰かを呼んでいた。しばらくすると、呼ばれた人と交代して、私の前に来た。

「どうぞ、ご案内します」　言いながら、エレベーターに向って歩いていく。私も後について歩き、乗り込んだ。一階、二階上に上がる。男の人は、「私は中田善男、今日から、あなたについて一切のご用を受けます」　私はまごついた。

「僕は、塚本祥子一知り合いは全員「しょう」と呼んでいます」

理由はわからないが、伝えておいたほうが言いように思えた。

「解りました。中田と呼んでください」　私は頷いた。気がついたと

きは、部屋にいた。もつと、自分のことを話しておくれ必要があると思いついた。

「あのー、ここに行くように教えられているだけー、一週間いたいです」「解っています。私が取り計らいます」この人は、何もかも知つているのかもしれない。危険な人ではないのかも…。

「食事は部屋でしますか」「はい、三度ともね」私はつづけた。「服がないから一週間分と本を何冊かお願ひします」中田さんは、何もかも心得ているみたい。につこりすると、「用事はいつでもどうぞ」と言い残して部屋を出て行つた。

私は、部屋を見回した。壁は、きわめて薄い緑色、ベットは木枠で、布団は少し濃い目の緑色、カーテンも浴室にある小物も、すべて淡い変化にとんだ緑色、森を思い出す。置物、飾り物、どれをとっても、荒さはなく、優しさが思われる。

ベランダに出てみた。「あつた。あつた」二階の窓から見た森に違いない。木が沢山ある。

「父さん、母さん、すごくうれしい。ありがと」「これで生きていかれる。私はどうしても、山や木が無くてはだめなんのだ。本当にうれしい。

このベランダは、私がいる部屋だけのものらしい。上の階も、横の部屋も無い。どこからも見られずに、イスで眠ることもできる。手すりには切り抜かれた模様の金属枠がはめ込まれている。イスに座り、森を見て、山の友達を思い出していた。

どれほどの時間が過ぎたか解らないが、わずかな鈴の音に気がついた。固まつた足をさすりのばすと、立ち上がり部屋にもどつた。中田さんが、いくつもの買い物袋と食事を携えて立つていた。

「居眠りしていたのか音がわからなかつた」といしながら、急いで近づいていった。中田さんは、にこにこしながら、「あちらで食事して下さい」と南側のテーブルに食事を運んでくれた。私は、洗面所に走り、手を荒い、イスに戻り食事を始めた。

「すごく、おいしい」言いながら、口にいっぶい入れて食べた。

「いつも、お世話になるのは気が引けるけど」と云うと、「気にしないで、なんでもどうぞ」といしながら、本を出して、小さなテーブルに積んでいた。私が食べ終わると、かたづけに取り掛かり、「ほかに用事はありませんか」と聞いてくれた。

私は、一つ残酷な仕打ちを解決しなくてはならないのに悩んでいた。何度も中田さんの顔を見ていたから、帰られぬらしい。私は、思い切って話してみた。

「あのね、今朝、何も言わないで家を出てきたから、家人達が心配していると思うの」中田さんは、わたしの事全部理解しているみたい。

「どなたに連絡したいのですか」 中田さんは、ちゃんと心得ていた。

「塚原高校の勝彦君に、一週間留守にするだけ伝えて下さー」

中田さんは、頭を下げる咄と出で行かれた。

一週間が過ぎた。今は家にいる。夕食を済ませ、居間で寛いでいる。パパさんも、ママさんもいる。勝彦は、私よりはなれたイスに掛けている。テレビは、世界遺産の教会を写している。誰も見ていない。だれかが話し出すのを待っている。私も待ったが、誰も助けてくれなそうにない。生活を変えたのは私だ。説明しなければいけないのも私だ。

「僕は、たずねてくるのを待つていなければいけないのを、すっかり忘れていた。時間が過ぎていたので飛び出したけど、今はすぐ反省しています。『ごめんなさい。これからも毎月、今度のようないことをしなければいけないんです。』これで説明になるのだろうか。どう話せば解るのか、解るよう話すことは、私にはできない。後ろめたく思つけど、避けられないことだから、伝えてみた。

黙つて聞いていたパパさんが、私の顔をジーと見てから言った。「君一人で対処できるのかね」 どう答えていいのかわからない。やはり疑問なんだ。

「僕にわかっているのは、一人で一週間を過ごすことだけです。辛くはないです。でも、三人に会えないのは辛いです。ほかのことは何でもありません。ほとんど部屋にいます。不自由はありませんでした」私は、少しだけ説明を省いて伝えた。

山の友達のことも、両親のことも言わない。この家族は、私を心配してくれているから…。

「お金を沢山持っているとは思えないがね」

「はい、そのとうりです」私は同意しました。

「僕にもわからないのですが、父からカードを貰っています」カードを出して、パパさんに渡した。

「そのカードを見たホテルの人は、何も言わずに、僕の世話をしてくれました」三人とも私を見ていた。

「君は、一人で山から来たのだね」パパさんは、考えながらいうと、「部屋に行きなさい」今日はこれで終わりだというように、締めくくつた。

私は、「おやすみなさい」と挨拶を残して階段を上つていった。もちろん、勝彦も付いてきた。ドアに手を掛けっていた私に、「進一に説明しろよ」怒ったような顔で、部屋に入つていく。私は、閉められたドアをしばらく見つめていた。勝彦の顔も気になる。進一と仲たがいをしたのか…。

ベットに入つても眠れない。ホテルのこと、中田さんのことを考えた。私一人を朝から夜寝るまで、面倒を見てくれる。私が重荷とならないように、気を使い、自由に部屋にいられることに心を碎いてくれた。カード一枚で、申し分なく一週間を過ごせたこと、いくら考えてもわからないことばかりだ。途中から考えをやめた。そういえば、「進一君に説明しろよ」とは、何の事。彼には関係ない。休む事は、勝彦から伝えられているだろう。ほかに言うことはない。眠くなつた。いつの間にか寝た。隣の壁が二、三回音がしたような……？。進一の顔も見たような……？。夢なの？ また寝た。

6 開放感

浮かれた気分の体育祭も終わり、学業に専念する時になった。私は、時間時間の勉強に集中して毎日を過ごしている。来週はテスト週間になる。進一の授業態度を見ていると、どうして秀才のかわからぬ。誰も真剣に、先生の話を聞いているのに、本に落書きをしては、私に見せえてにやけている。

一度にやけた所を見つかり、本を読まされた。いい氣味だと私はほくそ笑んだが大間違いだ。どこから、あんなに素敵な声が出でくるのだろう。二役も三役もやってのける。

女性は、丸みを帯びたやわらかく、ゆったりする声で読み、男性は、力強よく、少しおさえた太めの声、子供は、やや高めの幅を細めた、清らかな声、うつとり聞きほれた。

教室は、進一の声だけ、私の頭の中には、場面がありありと浮かんでくる。素敵な声に酔いしれていた。突然止まつた。一瞬、みんなは顔を見合せた。何がおきたかわからない。

「先生、僕は、今まで罰を受ければいいんですか」 進一の怒った声が飛んできた。

先生は苦笑して、「すまない」と誤つている。

「どうしてやめるんだよ。聞きほれていたのに」 私の口から文句が出ていた。

「おれは声優ではないよ」 また睨まれた。やっぱり、みんながほめる秀才なんだ。何をやらせてても、苦も無くやり遂げていく。

「今のは、お前に聞かせたくてさ」と 小声で言つと、済まして前を見ている。これは、ほのかな恋の場面であるはずだ。私のほほは熱くなつてきた。急いで本を見る振りをして下を向いた。ノートの端をやぶした紙が、そつと横から滑り込んできた。

「好き」とだけ書いてある。私はあわててノートに挟み込んだ。なおも下を向いた。

「しょう」あの女性の声で進一が呼んだ。私は何も言わないので、むこひに向いてくれるのを願つた。

「しょう」いつもの声だ。でも、まだあの声が私の耳の底に残つてゐる。しかたなく、

「なに」また呼ばれるのを恐れて、返事をして顔を見た。

「忘れるなよ」と言うと、先生の姿を目で追つ。声に劣らず、きりつとした横顔の素敵なこと。避けようとすればするほど、意識の中に入り込んでくる進一の存在。

ベルが鳴つた。私は、ほつとして急いで帰り支度をして、一人でさつさとロークに飛び出した。クスッと笑う声を聞いたが無視した。その後の日々は、進一も邪魔をしてこない。私は、家でも学校でも勉強に没頭した。朝は早く起きだして予習した。夜も遅くまで勉強した。誰かを意識した。多くの開きを残したくない一心で勉強した。そしてテストの日が来た。緊張していた。「肩の力を抜いてリラックス」と進一に言われた。無視、横にいるのも無視、見られているのも無視、全部無視した。テストに集中した。出来たのも、出来ないのもあるが終わつた。ほつとしている。

開放感でいっぱい。何でもいい。何かやりたい。勝彦を誘いどこかに行こう。夕食のときに聞いてみよう。

「勝彦、どこかに僕を連れて行つてくれないかなー?。初めてのテストも終わつたから、遊びたいんだ」

「俺とか?」何か不振そうな態度。

「友達と約束があるならいいよ」

「約束は無いさー。そうだ、君は遊園地に行つてないだろ?」「

うん、まだない

「よし、そこに行こう」私は、にっこり。パパさんもママさんも、にっこりしている。

「気をつけてやるんだぞ」とパパさんが注意している。

日曜日、二人は遊園地に出掛けた。沢山の人びつくりしている

私を、リードしながら人、人の間を通りぬかせてくれた。最初に観覧車に乗せてくれた。だんだん上つて行く。

「園内が良く見えるだろ？ どれに乗りたいか見とけよ」 勝彦が言う。

「あれがジエット、こっちがゴーカード」と 指差して説明してくれた。どうやら乗せたいものばかりのようだ。

「うまいよ、うまいよ食べてみな」 男の声に、思わず顔を向けた私のために、ホットドッグを買つてくれた。ケチャップの赤を見つめている私に、「おいしいよ、熱いからな」 歩きながら食べた。

「今度はこれ」と 勝彦が乗り場にならんだ。ジエットだ。重々しいものに縛られ席に着いた。動き出した。なんなんだこれは…。

猛烈なスピードにびっくり。「勝彦ー」 上つた、下りた。回転した。

「勝彦ー、怖いよー、怖いよー、勝彦」 勝彦は私の手を握つてくれる。楽しむどころではない。ふらふらして降りた。

「ごめん、きつかったかな」 身体を支えてくれる。

「怖かった。少し休みたいよ」 身体は勝手に揺れている。頭の中

は、上り下りと体験を繰り返していた。めまいがしている。

「わかった。歩けるか。ゆっくりでいい」 支えていた手を離した。男の子が男の子を抱えているのは、おかしく見られる。

ベンチで休んでいる間に、御弁当を買つてくれた。これも初めての経験。ママさんの味より濃いみたい。全部食べてお茶を飲み、元気になった。

山にいたときは、川に走り水を飲んだ。草の上で横になり青空を眺めて、友達とおしゃべりして、いつの間にか居眠りをしているのに、ここは大違ひの所なんだ。

誰もが歩く、みんなよく歩いている。次は射的をした。全部の玉を当てた。ぬいぐるみの兔を抱いて歩くうちに、山の友達を思い出した。今日は町の子をしている。うーちゃんは山にいてね。側を女の子が通る。「これあげる」と渡した。「ありがとう」と に

」つして言つ。

「山で父さんと撃つていたのか」と聞かれ、「うん、たびたびな」私の顔を見たが何も言わない。私は、父と撃ち合つた事を思い出した。空に木の玉を投げ上げては、打ち落とした。父のようない所をめがけて幾度も練習した。離れた木に吊るした木の根を打ち落とすこともやつた。時には練習ではない、実際の悲しみもある。小さな動物を抱えてくる父さんを見た。食事のためだ。私には絶対に撃つことを禁止していた。私も山の友達は撃たない。

最後にメリーゴーランドに乗せてくれた。前の恋人たちを真似して、手を繋いだ。ちょっと照れた勝彦の顔が赤い。私も同じだ。次の日から、ホテルに泊まりにいった。仲田さんは、親切に接してくれた。毎日を読書、勉強、山の友達の思い出と過ごした。夕方からは、森の広場に毛布一枚持ち、父と母に会いに行く。毛布にくるまり、寝転んで空に話した。学校の事、三人の事、友達の事、全部話した。声は夕空に吸い込まれていった。

「私の一番お友達は進一君なの。女の子の憧れの子よ。素敵な男の子なんだ。何でもてきて、頭がよく、ハンサムなんだ。すべてを独り占めしてるよ。不公平に思はない。でも、父さんには勝てないけれどね」

「しょう、そんな事いうなよ。隣で母さんが笑つていいぞ」空から聞こえた。私のおぼえてこいる声だ。「母さん」「めん。少しだけ私にも、父さん貸してよ」「少しだけよ」懐かしい母さんが答えてくれた。笑っているようだ。

「進一は、よく私をいじめるんだよ。ちびちびと言つては、あれやれ、これやれ、あれはだめ、これはだめと命令ばかりするんだ。ほんとにいやな奴だよ」空のどこかでクスッと笑つたような気がした。

「そんないやな奴と思つのかね」何か父さんは信じていないような言い方だ。

「父さんは見ていいから解らないと思うよ。それとも見えるの。

聞こえるのがも知れないね。もう一つ変なのはね、進一の睨む顔なんだよ。いく通りもあるんだ。少し口の端を上にして、目を横に向けるのと、その目に力が入るものあるよ。口を一文字にして、ぐーと目を大きくして睨む時が一番怖いよ。その時必ず「しょ「う」と呼んでから睨むんだ」 空の一一所が少し明るい。

「父さんが笑うけど、私はすごく怖い時があるよ」「それでも友達だろう」父さんが言つ。

「そうだね、友達なんだ」

いつの頃からか、私を守ってくれる人がいるようだ。広場の周りを歩いているのが解る。静かな足音だが、聞き覚えのある歩き方だ。山の友達と遊んでいたから、わずかな音でもすぐわかる。ここは、山の友達が来てはいけない所だから。

一番の変化は、彼が来ることだ。私がここにいるのがどうしてわかるのか、絶対に教えてくれない。私が、ホテルに帰る時間の少し前になると、そつと近づいてくる。寝転んでいる横に自分も横たわる。

何も言わない。しばらくじっとして過ごす。時間になると、起きるのを手伝い、毛布を持ちホテルまで送る。それでさよならして別かれる。

何も言わない。何も聞かない。ただ、黙り一週間を付き合つてくれるだけ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5658h/>

僕 女の子

2010年10月10日04時37分発行